『万葉集』から見る日本の古典 ⑮

獨協大学特任教授　城崎　陽子

真間手児奈　その2

先回は『万葉集』の巻三と巻九に載る「真間手児奈」の歌を取り上げ、手児奈伝説が、どのようなものであるかをみた。今回は、この手児奈伝説が『万葉集』巻十四、いわゆる「東歌」にも収録されていることや、上田秋成の作品にも取られていることをみてみたいと思う。

先ずは、『万葉集』巻十四に収められている手児奈の歌を掲げる。

葛飾の　真間の手児奈を　まことかも　われによすとふ　真間の手児奈を
（巻十四・三三八四番歌）

葛飾の　真間の手児奈が　ありしばか　真間のおすひに　波もとどろに
（巻十四・三三八五番歌）

にほ鳥の　葛飾早稲を　贄すとも　その愛しきを　とに立てめやも
（巻十四・三三八六番歌）

足の音せず　行かむ駒もが　葛飾の　真間の継橋　やまず通はむ
（巻十四・三三八七番歌）

東歌に収録されている歌は、いずれも手児奈との恋を詠うものである。一首目の「まことかも　われによすとふ」とは、手児奈が自分を思ってくれていることで有頂天になっている様を、二首目は、手児奈の噂が轟くばかりであることを、そして、三首目は、厳重な祭りの最中であろうとも、愛しい人を外に立たせたままにできないことを、四首目は手児奈の所に通うために足音を立てない馬が欲しいことを詠う。東歌は万葉の時代、関東一円で詠われていた歌が収集されたと考えられているから、東歌に四首もの歌を残す手児奈の伝説はかなり喧伝されていたことがわかる。

手児奈の霊を祀る真間山弘法寺の寺伝に拠れば、天平九年（七三七）行基菩薩が、手児奈の伝説を聞き、自ら命を絶ったその心情を哀れと思って「求法寺」を建てたという。それからおよそ一〇〇年後の弘仁十三年（八一二）、弘法大師が寺域内の整備をし、「弘法寺」と名を変えたとされている。そして、鎌倉時代に日蓮宗の道場となり、文亀元年（一五〇一）、第七世日与聖人の夢枕に「手児奈」が現れ、「良縁成就」「孝子受胎」「無事安産」「健児育成」の守護を誓い、以来地元の信仰を集めてきたという。

伝説は人から人へと伝えられていくものであり、ましてや手児奈伝説は「良縁」や「安産」といった信仰を伴うようにもなっていた。こうした伝説を聞いた上田秋成が、これを骨子として物語を書いたことも、その伝説の名高さ故であろう。作品は『雨月物語』の中の「浅茅が宿」である。まずはそのあらすじを記し、手児奈伝説の部分のみを引用する。

下総の国葛飾郡真間の郷に、勝四郎という男がいた。家はもともと田畑を多く所有する分限者であったが、勝四郎という男は、物にこだわらない性格で、次第に貧乏になってしまった。親類縁者からも疎まれるようになり、悔しく思った勝四郎は一旗揚げたいと考えるようになった。足利産の絹織物を京へ運び、商売をすることを誘われ、残る田畑を売って、絹に替え、いよいよ出発することとなった。ところで、勝四郎には宮木という見目麗しい妻がいた。宮木は勝四郎が一日も早く帰ってくることを願い、勝四郎を見送る。

真間の手児奈のもとへ通うために渡ったとされる継橋

ところが、世の中そうそう上手くいくものではない。勝四郎が京での商売に励んでいた頃、関東一円は鎌倉公方足利氏と関東管領上杉氏との戦によって戦場と化してしまい、宮木の行方もわからなくなってしまう。勝四郎はというと、帰る途中に盗賊に金銀を奪われ、その上、病にかかってしまう。そうこうしている内に七年という年月が経ってしまった。これほどの年月が経ってみると、やはり思い起こされるのは妻のことで、勝四郎は何とか下総の国葛飾郡真間の郷に帰って来たのである。見慣れた家へ立ち戻り、声をかけてみると妻の声がする。待っていた妻と時を惜しむかのように語り合い、その夜は臥した。ところが、翌朝になってみると妻の姿は無く、家は荒れ果て、塚が一つ築かれていた。地元の翁に話を聞くと、妻は既に無くなって久しいということであった。

寝られぬまゝに翁かたりていふ。「翁が祖父の其祖父すらも生まれぬはるかの往古の事よ。此郷に真間の手児女といふいと美しき娘子ありけり。家貧しければ、身には麻衣に青衿つけて、髪だも梳らず、履だも穿かずあれど、面は望の夜の月のごと、笑ば花の艶ふが如、綾錦に裏める京女臈にも勝りたれとて、この里人はもとより、京の防人等、国の隣の人までも、言をよせて恋慕ばざるはなかりしを、手児女物うき事に思ひ沈みつゝ、おほくの人の心に報ひすとて、此浦回の波に身を投げしことを、世の哀なる例とて、いにしへの人は歌にもよみ給ひてかたり伝へしを、翁が稚かりしときに、母のおもしろく語り給ふをさへいと哀なることに聞しを、此亡人の心は昔の手児女がをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけん」と、かたる〳〵涙さしぐみてとゞめかぬるぞ、老は物えこらへぬなりけり。

寝られぬままに翁が語ったことは、昔、この里には真間の手児女という美女がいた。家は貧しかったので、髪も櫛梳らず、履もはかないようなあり様だったが、その顔色は望月のようであり、そのほほ笑みは花の匂うようであったという。そして、誰もが思いを寄せた。しかし、手児女は「おほくの人の心に報ひす」と言って、海に身を投げたという。そして、同じく勝四郎を待って亡くなった宮木の心は、手児女のうぶな心持よりも数段まさって悲しいと、翁は語った。

真間の手児奈の伝説に触発されて勝四郎と宮木の物語を書いた秋成の心持に「昔の手児女がをさなき心に幾らをかまさりて悲しかりけん」という一つの判断があったことはいうまでもない。あの手児奈の伝説よりも更に悲しい物語であることを強調すると言ってもよかろう。かくして、手児奈は「良縁」や「安産」といった現世利益をもたらすものとして祀られる一方、文学史のなかでは「女心」を判断することの一つの基準ともなっていったのである。

富士登拝代参守の御案内

この代参守は、高尾山から続く祈りの道を、修験者によって運ばれ、霊峰富士山頂にて法楽し、本年一年の、諸縁吉祥・諸願円満の為に、ご祈念致します。

（授与料）一体壱千円以上（代参守と碑伝遵わせて）

〈申し込み方法〉

山上・御護摩受付所又は、葉書に郵便番号・住所・氏名（必ずフリガナを明記下さい。）電話番号を明記の上、左記までお申し込み下さい。

〒一九三―八六八六
八王子市高尾町二二七七
大本山高尾山薬王院内
富士登拝事務局